

ベルリンの世界遺産 近代集合住宅群を読む

KS
DP 関西大学
戦略的研究基盤
団地再編
リーフレット
Re-DANCHI leaflet

文部科学省 私立大学 戦略的研究基盤形成支援事業
『集合住宅“団地”の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究』

MARCH 2012
VOL.006



図1. ヴァイセ・シュタットのヘラクレスの柱

ドイツ・ベルリン市内に1920年代に建設された近代集合住宅群の6地区がユネスコの世界文化遺産に指定されているが、今回そのうちの5地区を踏査した。これらは第1次世界大戦後の住宅不足に対する施策として公的要請により供給されたもので、社会事情ゆえの低いコストを求められながらも、高い知性を駆使して当時の低所得者の生活水準改善をめざした計画者の理念が込められた建物である。それゆえにこそ原状回復の努力がなされて住み継がれていることの意義が大きく、調査で住民が愛着をもって住んでいる様子を見るにつけても、生活の原点への配慮ある環境—団地再編の目標とする持続的環境—が維持されていることを随所に確認することができた。

調査住宅群は下記である。

- ①ガルテンシュタット・ファルケンベルク（1912）
- ②グロスジードルンク・ブリッツ（1925）
- ③ヴォーンシュタット・カール・レギエン（1928）
- ④ヴァイセ・シュタット（1929）
- ⑤グロスジードルンク・ジューメンスシュタット（1929）

これらの地区はベルリン市の環状鉄道の外縁に分布しており、当時の市域のスプロールが及んだ範囲をたどることが出来る。しかしいずれも公共交通機関を利用して、市中心部まで20～30分ほどで行ける感覚のところであり、都市形成の根底に居住地環境の整備がおかれていることの実感をもって調査が始まった。



図2. ベルリン市世界遺産近代集合住宅¹⁾

観察の視点を下記においている。

- 1) 住居群はどのように都市空間になじみ込んでいるか（領域性）
- 2) 住民の帰属意識を喚起する場になっているか（個別性）
- 3) 沿道感覚を伴った明快な住居群になっているか（沿道性）
- 4) ヒューマンスケールを保っているか
- 5) 空地は自然を取込み、活用・維持されているか



図3. ヴァイセ・シュタット配置図²⁾



図4. 他者建物をゲートにした



図5. ヴァイセ・シュタット街角施設



図6. ヴァイセ・シュタット道路沿い建物角



図7. ヴァイセ・シュタット住棟前緑地

1. ヴァイセ シュタット

1929年～1931年

設計 オットー・サルフィスベルク

マルティン・ワグナー

戸数 1,268戸 3～5階建

■道路を内部化させ、そこにフィクショナルな意味を付加して住居群を都市になじみ込ませた

東西・南北2本の道路の片側に住居群のエリアが展開する。東西方向の道路を東（地下鉄駅）から接近すると最初の交差点がエリアの東端部分にあたって、道路の両側に他者の建物が建っている。設計者は2つの建物をゲートとして扱うことを発想するとともに、隣接して連結させた住棟を配置して（道路の両サイドに）道路を内部化すること意図した。道路を西に進んだ、他端の交差点でも対側に□型の住棟を置くことで同じく道路空間の取り込みをしている。

南北方向の道路では南玄関にあたる部分の両サイドの歩道上に建物を突出させて建て、北側エンドでは住棟を道路に跨がせることで閉鎖感を高めた。道路が湾曲していることがより効果的である。

ヘラクレスの柱と地中海を連想する構想で、横に展開する住居群はさながらヨーロッパということになる。

強引な手法ではあるが、おそらく道路と住宅を同時に計画する状況があったのではないだろうか。都市空間としての住居群の独自性を印象づけるとともに、フィクショナルな演出が居住者の帰属意識に反映していると思われる。

■エリア内では、住棟をめぐる道路に沿道性をもたせることを意図しており、街角、建物角等の計画の配慮ができています

道路沿いの住棟はシンプルで正面性を保ったデザインを基本としているが、部分的に突出した住戸を配し

て分節化を図っている。

道路の交点には店舗やオフィスの非住宅施設をスケールに変化をつけて配置して、街角を印象付けているので道路に活気が生じる。住棟エリアを巡っている道路には、湾曲させてリズムを出すねらいと、住棟角や住棟妻にあたる結節点にポケット的な空間を繰り返してつくり、沿道性を高めている。

■住棟間の空地の状態

住棟間の空地に特別の工夫はされていないが、エリア外とのゆるい隔離をした住棟配置がなされているので、適度に分割された空間が維持されている。平行配置3階住棟に囲まれた部分は落ち着いたスケールで、自然の気配豊かな空間が出来上がっているが、囲み型住棟の部分には未解決な曖昧な空間になっているところがある。

デザインの繊細さは少ないが、基本のしっかりした住居群である。

2. ブリッツ

1925年～1930年

設計 ブルーノ・タウト

マルティン・ワグナー

戸数 集合住宅 1,556戸 3階建

タウンハウス 407戸 3階建

■自然を内包した複合住居群が周辺一体に広がっており、美しい地域がゆるやかな都市性を持ってなじみ込んでいる

馬蹄型の集合住宅と連棟タウンハウスが自然を豊かに抱えて、有機体を思わせるエリアをつくっていて圧巻である。

中心になるのは、有機体の心臓を連想する馬蹄型の集合住宅棟だが、円形にすることで神秘性を演出していて魅力的である。円形の住棟は内部にシンボリックな広場を抱えている。馬蹄の切れ目の開口部は東を向いていて朝日を受け入れる。主道路



図 8. ブリッツ 池のある広場



図 10. ブリッツ 街角施設



図 12. ブリッツ 路上駐車



図 9. ブリッツ 配置図²⁾



図 11. ブリッツ 街路樹と壁面



図 13. ブリッツ プライベート庭

に面したこの開口は幅が 20m 程度に絞られているので、他者は道路からこの大きな広場をほんの瞬間、垣間見るのである。

ここを通過するとあとは小さな開口が 3 つだけ穿かれた曲面の壁をたどって一周することになる。たいへん求心性が強い空間の焦点の部分である大きい開口の周辺に共用施設が配置されている。

円形棟の居住者は周回道路を廻って玄関に辿りついて、住戸内部から中央の広場を大きく共有している。住棟は 3 階建てでスケールが心地よく、土地に傾斜がついているので円形の建物は自然に分節されて、スカイラインや壁面を変化させている。階段室と玄関まわりは丁寧にデザインされていて嬉しい。

まことにうまく出来ているが気になるのは、玄関が円形の外側、つまり凸面にあるので、ぶっきらぼうで人を招き入れる感じが弱いこと、言い換えれば円形の壁面が単調にならざるをえないことである。

小さい開口から噴き出した力は、あたかも心臓から流れるでる血液が浸透していくように他の集合住宅棟やタウンハウス棟に続いていくが、各棟の長さがオーバースケールに

なっておらず、微妙な住棟のずれ、弧を描いた配置などの繊細な配慮が有効にはたらいっている。そして街角には店舗等の施設を配置し、住棟妻などの建物角は必ず形と色彩によって変化が加えられている。

■沿道性

全域に 2 ～ 3 階建住宅によるヒューマンなスケールの沿道が確保されていて、建物形状による変化が街角、建物角、建物妻の特徴をつくり、街路樹と建物、両側に沿う建物との間の空間などに適度なリズムが発生して、いかにも静かな場所が形成されている。路上駐車が自然である。

■プライベートな庭が集結した濃密な外部空間

中央に池を持つメインの広場と、わずかの小広場と、段差も柵も設けない道路際の空地は共同管理されているが、それ以外のすべての空地はプライベートな庭である。クラインガルテンの伝統があるゆえなのか、それらの庭は他者の来訪を拒まない風につくられよく維持されている。管理のあいまいな空地を持たないことで濃密な外部空間が出来上がり、よく維持されている。

3. カール・レギエン

1928 年～ 1930 年

設計 ブルノ・タウト

戸数 1,145 戸 4 ～ 5 階建

■アクティブな都市空間にパッシブな空間をなじみ込ませ、4 階～ 5 階の集合住宅を建てた。ベルリン市街の典型的な建築型は凸型の囲み建物で、周辺はそういう市街地である（アクティブな都市空間）

設計者はこの場所に主道路に向けて凹型の囲み建物を計画した。ねらいはかねがね思慮している都市と自然の融合であり。密度の高い場所より効果的に実現させようとした。

道路の両側に車を止められるだけセットバックをして 3 ブロックにわたって凹型建物を並べて、約 200 m の道路空間を周辺と異なったものにしてなじみ込ませようとした（パッシブな都市空間）。

ブロックの幅いっぱいを使って住棟間の中庭を広くしておいて、間口の大きいバルコニー付の連続住宅を成立させた。道路側の外観デザインはシンプルな形状をモノトーンにして目立たせていないが、彩色を施した中庭面を居住者が共有している。（道路サイド 5 階・奥の方は 4 階）



図 14. カール・レギエン パッシブ都市空間



図 16. 同左



図 18. ジーメンスシュタット構内緑地



図 15. カール・レギエン 配置図²⁾



図 17. ジーメンスシュタット 配置図²⁾



図 19. ジーメンスシュタット道路沿い緑地

■沿道性

4 周道路の建築の 3 方は周辺の建物と同じ建て方で、玄関はそちら側に設けて、道路に面したところは店舗等になっている。そして正面に当たる主道路面を上記のパッシブ都市空間にして、部分的に店舗を配置し、建物妻は正面性をもったデザインにするなど、沿道の連続間の絶たない配慮がされている。

自動車の処理は道路沿いの駐車場以外は不明である。

■密度感の高い住棟間空地に自然を涵養する

住棟間の中庭は道路から見えているが他者は入れない。居住者の使いざまを詳しく観察できなかったが、特に手を加えられていない、静謐を保った都市内のエアポケットのような空間である。

4. ジーメンスシュタット

1929 年～ 1934 年

設計 ハンス・シャロウン
ワルター・グロピウス
マルティン・ワグナー他
戸数 1,370 戸 4～5 階建

■住棟の配列計画は明解である。住居群を都市になじみ込ませようという意識は希薄で、合理的で独立性の高い団地である。

有名な集合住宅群である。相互に干渉し合わない住棟配置を行いながら、棟ごとに設計者の独自の表現が競演されている。後のわが国の団地計画は多く参考にした。

■沿道性

東西方向の道路では、超長大住棟をゆるい弧状にして、道路を隔てて直交する住棟のずらし配置とのリズムで沿道感を醸しだしている。

南北方向の道路沿いはもうひとつの長い住棟と、道路をはさんで平行に対面する住棟を一人の設計者(グロピウス)が設計を行っていて、生

み出された道路と一体になったオープンな緑地が都市空間として新鮮である。

■自由だが領域意識が希薄な住棟間の緑地が存在している。

住棟間の緑地とそれに続くさらに大きな緑地は相応の管理がなされていて、ジードルンクに見る典型的な空地である。誰でも自由に入れる一方で居住者の生活のためといった閉じた領域意識はここにはない。

居住者の帰属意識を感覚的(空間的)に喚起する重要な要素を放棄していることになる。

合理的であって、しかしヒューマンな空間を生み出す集合形たりえなかった集合住宅といえるだろう。

<注>

1) ベルリン地図に加筆

2) 「HOUSING ESTATES IN THE BERLIN MODERN STYLE, NOMINATION FOR INSCRIPTION ON THE UNESCO WORLD HERITAGE LIST」に加筆、Senator for Urban Development、<http://www.stadtentwicklung.berlin.de>

3) 写真は全て安原秀撮影